神奈川新聞　2011年1月24日

先端科学

総研大の現場から

社会的責任 常に意識を

これからの科学者養成

総合研究大学院大学理事・学融合推進センター長
池内　了

現代文明は科学・技術文明といわれる。製品の生産工程や流通段階から私たちの日常生活までのすべての場面が、科学・技術の成果の上に成り立っているためである。そのおかげで、私たちは便利で優雅な生活を満喫し、生産力も大幅に上昇した。科学・技術があればこそ、現代の豊かな生活が実現できているといえるだろう。しかし、科学・技術に起因する弊害も多く生じている。交通事故や薬害などの直接的被害だけでなく、ケータイやインターネットが原因のトラブルなどもあり、さらにいったん地震や大火事があれば多大な犠牲者が出るような脆弱（ぜいじゃく）な都市構造としてしまったことだ。いかなる事柄にもコインの裏表のように、光と影、プラス面とマイナス面があり、科学・技術も例外ではない。

一般には、科学・技術の所産は価値中立的だといわれる。リンゴの皮をむくナイフが人殺しにも使えるように、またロボットは介護・家事・消防・癒やしの便利な道具となるが戦場に出て兵士の身代わりにもなるように、人間の生活に役立つためにも人に害するためにも使うことができる。要は使いようなのである。だからといって、それらを研究し開発した科学者・技術者には悪用された場合の倫理責任はないのだろうか。

この問題が大きくクローズアップされたのが原爆の開発であった。科学者たちは世界最初の原子力エネルギーの解放という好奇心から研究に熱中したが、最終的には政治家に占有されて世界を核戦争の恐怖に陥れることになった。開発したのは科学者だが、使用したのは政治家だから科学者には責任がないという論があったのも事実である。しかし、一般の市民より知識が豊富で、その発明によって何がもたらされるかを想像することができる科学者には、社会に向かって警告を与える義務があるという意見が出された。科学者は、科学の成果が正しく使われるための社会的責任を持っているというわけだ。

総研大は科学者を養成することを目的とする大学院のみの大学であり、ここから多くの科学者が輩出している。そこで学ぶ科学者の卵である学生たちを、科学者の倫理や社会的責任を常に意識する研究者として育てようとの目標を持って「科学と社会」という科目を新設している。私はそれを担当する一人である。

科学の成果が社会に円滑に受容されていく条件は何か、私たちは一般市民からどのような責任を課せられているか、その責任を果たすために何をしなければならないか―など科学者として持つべき社会的リテラシー（社会人としての規範）の涵（かん）養（よう）といえるかもしれない。あまりに専門分化が進み、たこつぼ化した状態にある現代の科学者像への反省もある。このような科目の開設は、全国で最初の試みではないだろうか。地味で、息の長い分野であるが、科学が人類のために生かされる社会にするためには、不可欠の教育であると思っている。

◇

全22回にわたって総研大で行われている研究・教育の中身を紹介してきました。地元に存在する大学をもっと身近に感じてもらうとともに、総研大で行われている世界をリードする多様な研究を知っていただきたいと思ってのことです。まだまだ紹介しきれていない分野やテーマもあり、またこのような機会があるのを楽しみにしています。

（おわり）

社会的責任を持った研究者の育成を目指す総合研究大学院大学の葉山キャンパス

いけうち・さとる　1944年兵庫県生まれ。京都大学大学院理学研究科修了。京大、北大、東大、阪大、名大、早大を経て、2006年から総研大に赴任し、08年より理事。学融合推進センター長を兼ねる。『科学の落し穴』『禁断の科学』『疑似科学入門』などの著書がある。